

第28回 謙虚な、あまりに謙虚な日本人

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。(財)国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌『国民経済』、2004年)、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データはためになる!』(技術評論社、2012年)等。



あなたは自分の父親を超えたか

国際比較データに目を通していると、「何故こんなに日本人は自信がないのだろう」あるいは「何故こんなに日本人は謙虚なのだろう」と感じる結果に出会うことが多い。今回は、そんなデータを三つ紹介しよう。

まず、仕事面で、子どもの頃の父親と比べて、各人の現在の社会的地位は上昇したかどうかを聞いているISSP調査を見てみよう。

調査結果は、図1の通り、少なくとも日本人にとっては驚くべきものとなっている。すなわち、世界38か国の中で、日本人だけが、父親より社会的地位が低下したと思っている者が上昇したと思っている者より多いのである。しかも、地位下落は4割と地位上昇の3割より1割も多いのである。図を見ていたければ一目瞭然であるが、日本のような国は他にない。どの国でも、現在の世代の人間は少しは自分の父親を凌駕していると思っているのに、日本だけが、父親の世代には敵わないと思っているのだ。取りようによっては、日本社会の閉塞感を何よりも端的に示した意識調

査結果といえよう。

日本と正反対なのが中国である。中国では7割が父親の仕事より高い仕事に就いていると考えており、この値は2位のポルトガルの60.1%、3位フランスの57.3%を大きく上回っている。

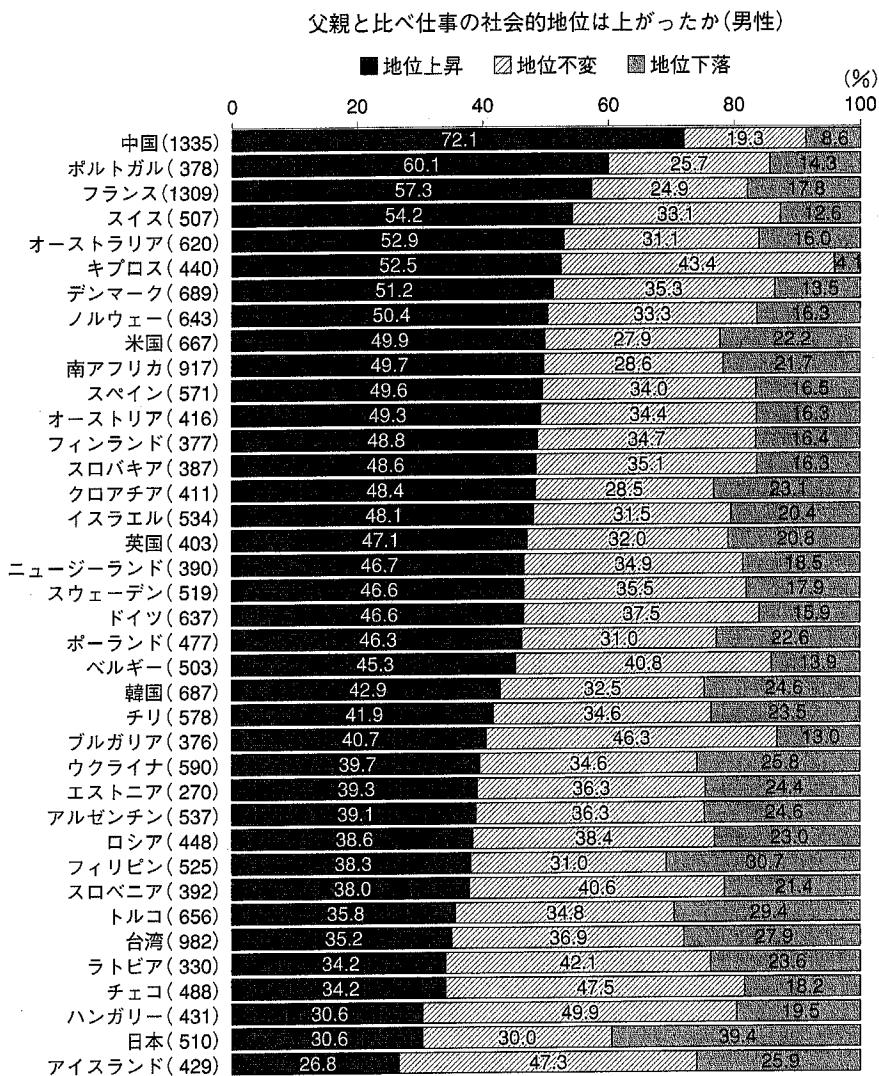
こうした結果が、この設問のそもそもの調査目的である社会階層の変動状況をストレートにあらわしているとは考えにくい。日本の社会が、世界と比較して、こんなにも停滞的、ないし、階層固定的であるとも、また、必ずしも前世代と比較して今の世代の仕事の内容がグレードダウンしているとも思われない。

一方で、中国の結果は激しい社会変動をあらわしていると考えられるが、中国と同じように、父親の仕事より高い仕事に就いているという回答率が高いフランスの社会が、こうした意識に比例して、変動的、あるいは上向的だとも思われない。フランスの場合、何か父親を超えていたと思われる力が働いているのだろうと想像する。

日本の場合は、それとは逆に、何か前世代より劣っていると思い込ませる心理的なメカニズムが

働いているのであろう。こうした結果が日本人の自信喪失をあらわしているのであれば、日本人のこんな気分は是非とも打破せねばならない。

図1 あなたは自分の父親を超えたか(2009年)



注) 国際的な継続的共同調査であるISSP (International Social Survey Program) の2009年「職業と社会に関する国際比較調査」による。設問は以下の【参考】の通り。地位上昇は1+2、地位不变は3、地位下落は4+5とし、1~5の計(図のカッコ内の数値)を100とする構成比で示した。

資料) ISSP HP (<http://www.issp.org/index.php>)

【参考】調査票の設問内容

Q13. 現在のあなたの仕事の社会的な位置づけは、あなたが15歳のときの父親の仕事と比べてどうですか。
最もあてはまるものに1つだけ○をつけてください。(○は1つ)
現在仕事をお持ちでない方は、最後にしていた仕事についてお答えください。

- | | | | | | | |
|---------------------|------------|-------------|------------|---------------|-----------------|--------------------------------------|
| 社会的な位置づけは、父親と比べると…… | | | | | | |
| 1 自分のほうがかなり高い | 2 自分のほうが高い | 3 だいたい同じくらい | 4 自分のほうが低い | 5 自分のほうがかなり低い | 6 自分は仕事をしたことがない | 7 父親はいなかった、父親は仕事をしていなかった、父親の仕事がわからない |

あるいは、フランス人はプライドが高く、大した根拠もなく自分は父親を超えてると思い込んでおり、逆に、謙虚な日本人は、どんな仕事であっても、父親が仕事に打ち込んでいた姿に気高いものを感じ、自分は敵わないと思いつがちなだけなのであろう。

社会階層の変動状況を見るための指標としては、この意識調査結果はやや問題ありと考えられるが、それとは別の何か大事なことをあらわしていると考えられるのである。

謙虚すぎる日本人の自國評価

英國BBC放送が、毎年、行っている世界世論調査では、主要国に対する各国国民の評価(世界にプラスの影響を与えているか、それともマイナスの影響を与えているか)を調べている。2013年調査では、主要17か国・地域(EUを含む)について、世界25か国、約2.6万人(各國約1,000人)の成人に聞くアンケート調査を実施している。留意すべきは、評価する対象は国であるが、評価者は各國国民である点である(例えば、日本への評価であり、日本人への評価ではない)。

この調査で一般に注目さ

れるのは、各国がどれだけ世界からプラスの評価を受けているかであるが、ここでは、世界からの評価と自国民の評価との関係に着目してみよう。図2には、各国の世界からの評価と自国民の評価を折れ線グラフで対照的に示し、また、後者から前者を引いた値を自信過剰度として棒グラフで表した複合グラフを掲げた。

当然であるとも言えるが、各国民は、世界からの評価より高く自国を評価しているのが一般的である。日本人からすると考えられないほど、どの国民も自信に満ちあふれているのである。自信過剰度の高い順に国をあげると、中国、ブラジル、インド、韓国、カナダ、フランス、ロシアの順となる。中国人は何と77%が自國は世界に対して「良い影響」を与えていていると考えているのだ（世界からの評価は40%であるのに）。

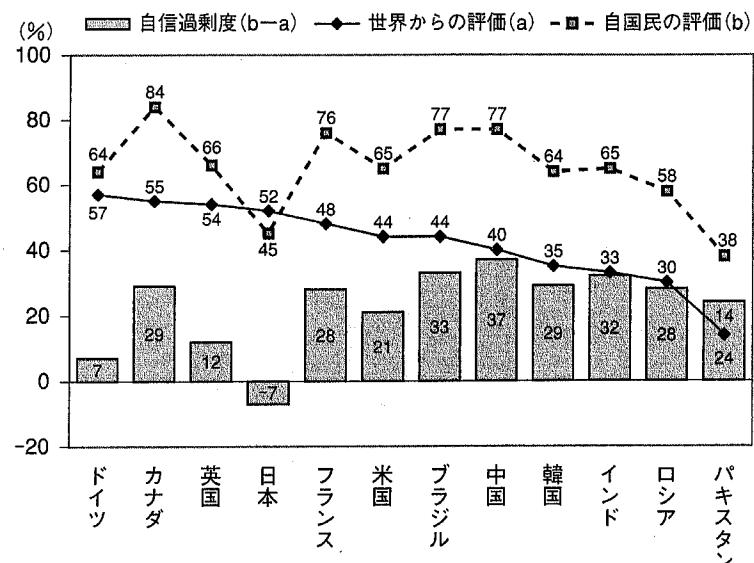
比較的クールに自國評価をしている国民はドイツ人、英国人や米国人である。それでも世界評価より自國評価の方が高い。

そして、目立っているのは、唯一、日本人だけが自國評価が世界評価より低いという点である。状況は毎年同じであり、図に掲げた2013年では7%ポイントである両者の差が、20%ポイントに達していたこともある（2007年）。余り自信過剰なものも問題だが、謙虚すぎるのも問題だろう。自信がなさ過ぎ、自虐的評価と見られても仕方がない。日本人は、周囲や職場の人に対する個々人の態度と同様に、世界に対しても自信ありげな態度を示すと世界から叩かれると思っているかのようである。

日本統計学会の会長もつとめた統計学者の林知己夫は、「日本人らしさとは何か」を研究する

図2 世界からの評判と自国民の自國評価（2013年）

各国が世界に対して与えている影響について
「概してプラス」と回答した者の割合



注) 国の順番は世界からの評価が高い順。世界からの評価は、25か国、約2.6万人（各國約1,000人）の成人を対象とした面接及び電話による調査による（2012年12月10日～2013年4月9日調査実施）。ただし自国民の評価は除く。25か国は次の通り。米国、カナダ、ブラジル*、チリ、ペルー、メキシコ、ポーランド、ロシア、ギリシャ、英國、ドイツ、フランス、スペイン、トルコ*、エジプト*、ケニア*、ナイジェリア、ガーナ、インドネシア*、韓国、オーストラリア、日本、インド、中国*、パキスタン（*は都市部のみ）。図では、このうち評価対象17か国・地域（EUを含む）でもあり、世界評価と自国民評価のデータがともに得られる12か国を取り上げた。

資料) BBC World Service

ため、国民性に関する意識調査を1950年代から継続的に行い、また国民性に関する国際比較調査を何度も行ったが、自らが関係した数多くの調査の結果にあらわれた特徴として「晴れがましいことや、うぬぼれととられかねないことは遠慮してみせるという傾向や、物事の悪いほうばかりに目がいくという日本人の国民性」（林知己夫・櫻庭雅文（2002））を指摘している。そして、これが内向きには、進歩向上や改善意欲につながるので問題ないが、対外的には、「反目的な行動」あるいは「日本人の自虐意識」としてマイナスに作用する場合もあるとしている。

自殺と他殺のどちらが多いか

死亡統計の死因分類のうち、病死や事故死など通常の意図せざる死とは明確に区別される人為

的な死に関しては、一般に、自殺と他殺と戦死の三つに大別される。

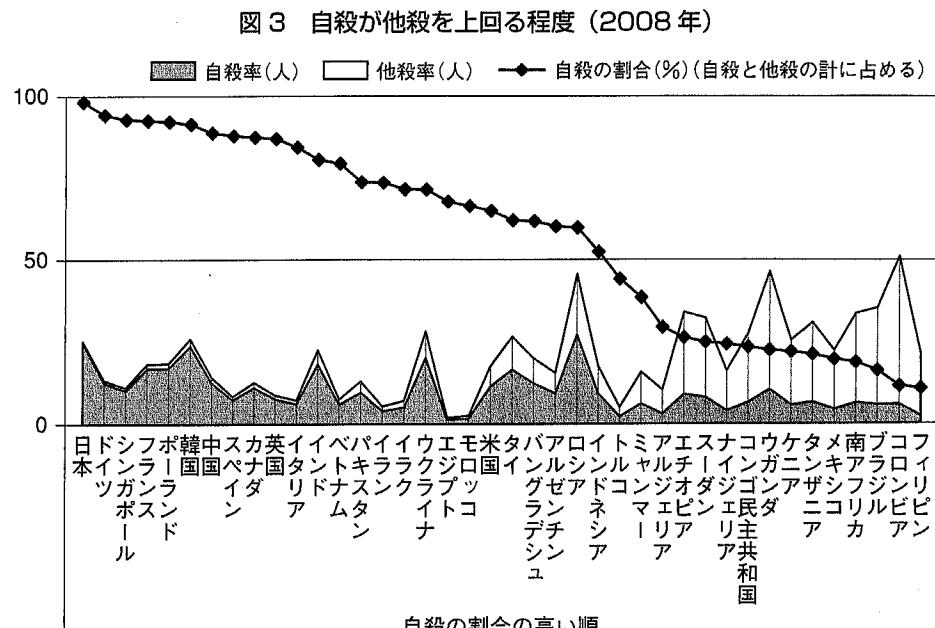
戦死は別にして、人生の行き詰まりに対する許されざる行為として、あるいはその場の衝動的な行為として、意図的な死が、自分に向かい自殺となってあらわれるか、他人に向かい他殺となってあらわれるかをWHO（世界保健機関）が収集・整理している世界各国の死因統計から見てみよう。

図3には、世界主要40か国の自殺率及び他殺率並びに自殺と他殺の計に占める自殺の割合を示した。

日本は自殺率が人口10万人当たり24.8人であり、ロシアの27.2人に次ぐ第2位の高さとなっている。韓国は23.7人で第3位であるが、OECDによれば、2009年以降は30人を超え、日本を大きく上回っている。

日本は他殺率の低さでも目立っている。すなわち、人口 10 万人当たり 0.5 人と下から 2 位のエジプトの 0.6 人、3 位のドイツの 0.8 人を下回って最下位である。ちなみに他殺率が最も高いのはコロンビアの 45.2 人である。

従って、日本の自殺の割合は 98.2% と第 2 位のドイツの 94.2% を上回って第 1 位である。他方、最もこの割合が低いのはフィリピンの 10.7% である。インドネシアとトルコの間に 50% ラインがあり、世界 40 か国のうち、自殺の方が多い国が 25 か国、他殺の方が多い国が 15 か国となっている。



注) 自殺率、他殺率は人口 10 万人当たり自殺者数、他殺者数。国は人口 3000 万人以上を対象とした。
ただし人口 460 万人のシンガポールは例外として掲載。

資料) WHO 「Global burden disease death estimates 2008」 April 2011

世界の地域別分布を見ると、比較的、傾向がはっきりしており、自殺の割合の高い方から、おむね、歐州・東アジア儒教圏 > 南アジア・中東・北アフリカ > 米国・ロシア > アフリカ > ラテンアメリカ の順となっている。詳しい分析はここではできないが、国の経済発展度、貧困度、治安等だけでなく、自殺や他殺についての宗教・倫理的な精神風土が大きく影響していると見られる。

自殺が多く、他殺が少ないという日本人の特徴は、日本人の謙虚さを表すものとは必ずしもいえないかもしれないが、内向性が外向性に勝るという点では、これに関連するデータであり、このため、ここで紹介した次第である。

* 「社会実情データ図録」関連図録

- [1] 図録 2775 「世界各国の自殺率と他殺率の相関」
 - [2] 図録 4682 「あなたは自分の父親を越えられたか
(国際比較)」
 - [3] 図録 8016 「日本を世界はどう見ているか」

*参考文献

- [1] 林知己夫・櫻庭雅文（2002）：数字が明かす日本人の潜在力—50年間の国民性調査データが証明した真実：講談社。